

---

# 乳母車の女

風間 淡然

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

乳母車の女

### 【Zコード】

Z9056

### 【作者名】

風間 淡然

### 【あらすじ】

それは私が小学生の頃のことだった。

ある熱帯夜に、それは起きた。

ちょっと怖いかも知ないので、苦手な人は読まないでください。

あれは小学生の頃だったか。

よくは憶えていないが、いまだに鮮明に憶えていることだある。矛盾している？ そうだね。そつなんだ。だから憶えているんだ。それがあまりにも奇妙なことだから。

その日は確か、夏の蒸し暑い日だった。私の寝ている部屋は、二階の道路に面した部屋である。部屋にエアコンなどなく、扇風機さえあつたかどうか憶えていない。ただ、蒸し暑い日だった。

部屋の電気を消していても、街灯の明かりが遮光カーテン越しに部屋の中に入ってくる。これは私だけかどうかわからないが、部屋の照明を消しても真っ暗にならないことにより、かえって夜の不気味さ、恐怖を助長していた。考えてみてほしい。外から照らされているということは、その光によって、外から誰かが見ている可能性もあるとはいえないだろうか？

時間は何時だか憶えていない。熱帯夜といつやつで、気持ち悪さに度々目覚めることはあった。目覚める度に時間を確認するというのも（よく、この手の話で聞くだろうが）、不自然というものだ。ひとついえることは、皆が寝静まっている時間ということであろうか。一階からテレビの音が聞こえないし、近所の家からの生活音も聞こえず、動物も寝静まっていたというのは憶えている。

そういうた、よくある蒸し暑い夏の夜、よくある真夜中に目が覚

めたところと、それをみた。

実家の前の、細い道路を、何者かが通つている。

硬いゴム製の車輪がアスファルトを撫でる音が響く。その音がまづ複数だったため、四輪であろうと思われる。なぜかそう、みえた。

そしてその車輪を押している”なにか”を感じた。その”なにか”は、人であるうと思われる。裸足で歩くときの、皮膚が大地と拍手すような音が、ゆっくりと聞こえてきたからだ。足音は、噛み締めるよひご、ゆつくり、ゆつくりと、響いてくる。

肉眼ではその光景を見ていない。だが、気配で”見える”のだ。足音でその人が誰であるかや、その状態がなんとなくわかつてしまふようなものに似ているのかも知れない。

そのとき見えたものは、濃紺の幌が張られた乳母車を、若い女が押している姿だった。

女は白いワンピースを着てあり、腰まで伸びた黒髪が印象的だった。体型は痩せており、顔は……怖くてそれ以上、その気配を掴もうと思わなかつた。その怖さというのが、こちらに見るよう、見るよう、執拗に誘う不気味さを伴つていた。まるで、みたらそのまま連れていかれてしまふような、そういう怖さだった。

これを書いていて気付いたのだが、その乳母車に、なにが乗つていたのか。私はつい今まで考えたこともなかつた。

ただじ……つと息を殺して、”なにか”が去るのを待つた。

”なにか”は、立ち止まる事なく、だがゆっくり、ゆっくり、こちらが好奇心に負けて顔を出すのを待つかのよう、ゆっくりと、道路を歩いて行つた。実際に私は何度も、カーテンを開けて見てしまいたい気になつていた。怖がっているにも関わらず、である。

異常な状況といつものほ、人の感覚や判断力も異常なものにしてしまつものではないだろうか。少なくとも、そうなりやすいはずだ。そしてそのとき、私も異常な衝動を抑えるのに必死だつた。震えながら、怯えながらも、好奇心に瞳は爛々と輝いていた。

結局”なにか”はそのまま去つていった。

その日以外、そうこうひと度もない。前にも後にも、その一夜限りのことである。

夢かも知れない。それでも別に構わないし、そのほうがむしろ気楽だ。

ただ、その夜のことは、いまいじて書いているよ、鮮明に思い出せる。二十年以上も経つが、あの夜の蒸し暑さ、あの車輪の音、あの足音、あの乳母車の色形、あの女の歪んだ口元は、色褪せず記憶にしがみついている。

書きながらまた思ったのだが、もしかしてあの女は、既にそのと

きから今この瞬間に到るまで、実家の前の道路を去ったあと、私の記憶の中に巣くってしまったのかも知れない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9056/>

---

乳母車の女

2010年10月15日09時11分発行